

檸檬

さだまさしの歌に、「檸檬」がある。

『檸檬』 作詩・作曲：さだまさし

或の日湯島聖堂の白い石の階段に腰かけて  
君は陽溜りの中へ盗んだ  
檸檬細い手でかざす  
それを暫くみつめた後で  
きれいねと云った後で齧る  
指のすきまから蒼い空に  
金糸雀色の風が舞う

喰べかけの檸檬聖橋から放る  
快速電車の赤い色がそれとすれ違う  
川面に波紋の拡がり数えたあと  
小さな溜息混じりに振り返り  
捨て去る時にはこうして出来るだけ  
遠くへ投げ上げるものよ

君はスクランブル交差点斜めに  
渡り乍ら不意に涙ぐんで  
まるでこの町は  
青春たちの姥捨山みたいだという  
ねえほらそこにもここにもかつて  
使い棄てられた愛が落ちてる  
時の流れという名の鳩が  
舞い下りてそれをついばんでいる  
喰べかけの夢を聖橋から放る  
各駅停車の檸檬色がそれをかみくたく  
二人の波紋の拡がり数えたあと  
小さな溜息混じりに振り返り  
消え去る時には こうして出来るだけ  
静かに墮ちてゆくものよ



ニコライ堂



神田川から聖橋を望む



『檸檬』は、シンガーソングライター・さだまさしがソロ歌手として出した三枚目のアルバム・『私花集(アンソロジー)』(1978年3月25日発表)に盛り込まれた作品である。

因みに、そのアルバムには、<sup>あかし</sup>案山子・<sup>こずもす</sup>秋桜なども入っていて、シンガーソングライターさだまさしの代表作品として、今になっても高く評価されている名曲揃いなのである。

一番で〈喰べかけの檸檬聖橋から放る〉と歌ったのを、二番で、〈喰べかけの夢を聖橋から放る〉と歌い替えたのは、彼女の手から放擲された檸檬が、快速電車の赤い色とすれ違い、各駅停車の檸檬色に噛み砕かれた瞬間、彼女は、青春の夢を砕かれ、彼との恋にも終止符を打って、これから堕ちて行こうと決心したからなのか。まがりなりにも彼女が青春を断念したからなのではないか。

その哀愁がお茶の水の学生街の雑踏と重なるとき、あの時代のささやかな悲しい思い出とも重なり、都市の構造化とともに失っていった心の構造をさやかに思い出すのである。